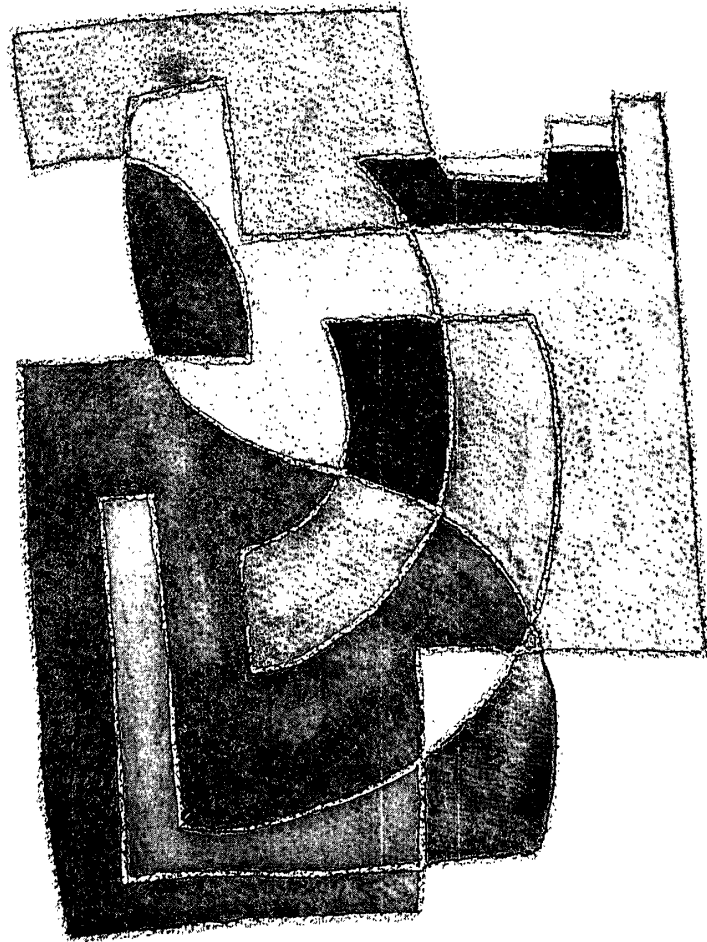


■
絵画作品



KII Toshiomi
プロローグ 30.0 × 40.0cm 2002

神聖なる平面性

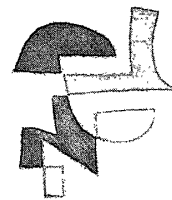
紀井利臣

今年の夏、久しぶりにミラノを訪れ、イタリアルネサンス以前の画家たちであるシエナ派やフィレンツェ派のテンペラ作品と再会した。その印象は以前とまったく変わっておらず、私に芸術の本質との再会の喜びを与えてくれた。

我々は、西欧の絵画理論の延長線上、主に印象派以降を小・中・高校の美術教育で学び、その見方や考え方で作品を制作し、鑑賞しているといっても過言ではない。そして、多くの人々はその理論の源流であるレオナルド・ダ・ヴィンチなどのルネサンス絵画に触れてみたいと思うのは自然なことであろう。しかし、私の場合、青春時代にイタリアで始めて出会ったのはそれ以前の金地背景のテンペラ板絵であった。最高の物質である金、それを画面に置き、輝くほどに磨き、それと等価に形態と色彩を施すという、装飾的かつ触覚的なものの見方が、西欧の平面性の源流であることを知ったのである。知識、権勢、栄誉に対する愛がルネサンス芸術として開花する以前の人々の敬虔な平面への感情表現が、そこには鮮烈にあり、芸術としての絵画における本質的なもの、その資質が独特な形で表現されていたのである。当時の画家達は機械技術 (artes mechanicae) という分野に属し、哲学者たち知識階級などの自由技術 (artes liberales) と比較すると地位は低く、また卑しい職業とされていた。ルネサンスに入りレオナルドやミケランジェロ、ラファエロなどの天才達の出現により、画家や彫刻家も哲学者と同じ自由技術の地位を獲得するのである。1550年に出版されたヴァザーリ著『美術家列伝』によって、そのことが歴史上に初めて刻まれることになる。

しかし、私のイタリアでの出会いはそれ以前の画家達であった。敬虔な祈りのために描かれた平面上の感情表現がそこには人知れず花開いていたのである。近代のアカデミズムに支配されていた私は完全に打ちのめされてしまった。以後、私の中には二つの感覚が生じてしまうこととなる。レオナルド以前の過去と、それ以降の未来の感覚である。どちらか一方を捨て去ることもできず、また、いったん知ってしまった事、それが神聖なるが故に無視して通り過ごすことはできなくなってしまった。

それ以後、私の中では500年の歴史が舞うことになり、イタリアは本質的な芸術と初めて出会った場所となる。



Kii Toshiomi ロンド 30.0×20.0cm 2002